

大阪市下水道科学館 インフォメーション

「夏休みイベント・水と環境の教室」 を開催

8月23日(金)、当館にて「夏休み・水と環境の教室」を開催しました。子どもたちを中心とした410名の来館者は、①下水道クイズラリー ②砂絵教室 ③微生物の観察や水の化学実験 ④ダーツゲームなどの多彩なイベントを通じて、楽しく学習しました。参加者からは「下水道について勉強になりました」、「楽しく時間を過ごせました」、「また、来ます」など励みになる意見をいただきました。

イベント情報

●**休日スクール** 親子で下水道のことを考えていただくイベントです。

- 第1回 10月27日(日)
- 第2回 12月1日(日)
- 第3回 1月26日(日)

●**シンポジウム** テーマは「下水道とエネルギー」
11月9日(土)

※イベントの詳細は、ホームページ等でお知らせします。



●所在地 〒554-0001
大阪市此花区高見1丁目2番53号
●電話 06-6466-3170
●FAX 06-6466-3165
●開館時間 午前9時30分～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
●休館日 毎週月曜日(月曜が休日の場合は翌日)、
年末年始
●入館無料 ◆無料駐車場あり
●大阪市下水道科学館ホームページアドレス
<http://www.city-osaka-sewerage-museum.or.jp/>
●アクセス
・阪神電鉄「淀川駅」下車 徒歩約7分
・地下鉄「野田阪神駅」下車 徒歩約15分
・JR西九条駅から市バス82号「高見一丁目」下車すぐ
・JR東西線「海老江駅」下車 徒歩約15分



Merとは

「Mer(メール)」とはフランス語で「海」を意味する言葉。命を育んだ海と、メッセージを伝える「メール(Mail)」の音を重ねています。この冊子では、これからも水という大切に身近な存在を通して、私たちの暮らしと未来について考えていきます。

人と地球のうらおいマガジン・メール2013年10月号

発行 一般財団法人 都市技術センター

〒541-0055 大阪市中央区船場中央2丁目2番5号-206

船場センタービル5号館2階

TEL 06-4963-2056

<http://www.uitech.jp/>

清流紀行 P02
「牛滝川」(岸和田市)

ガイアの瞳 P04
「水文化の未来像
～天川村に見るひとつの答え～」

水人之交 P08
「湖国の学習船うみのこ」(滋賀県)

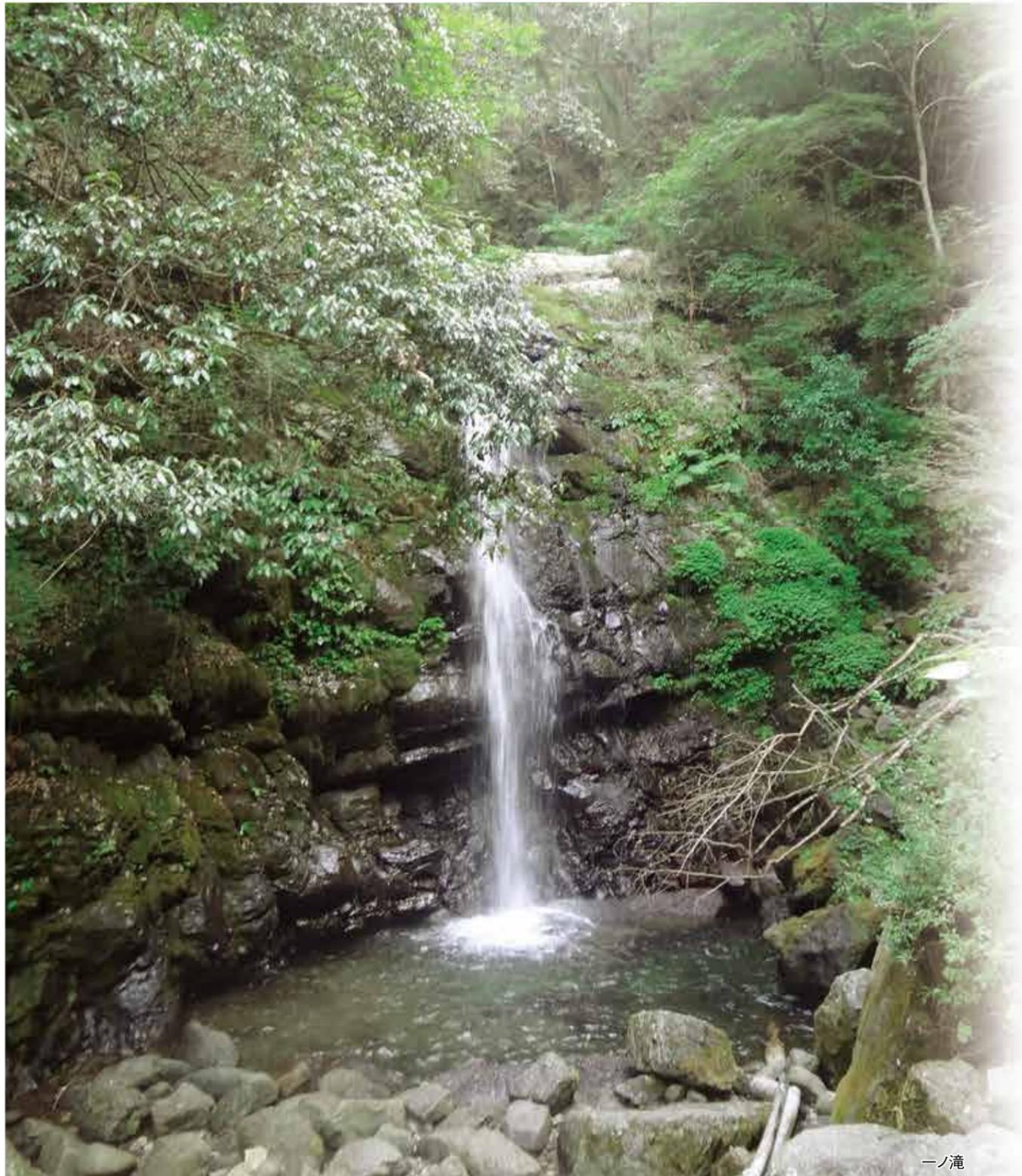
大阪府内の下水道情報 P12

センターだより P14

清流紀行

清流と滝が織り成す
風光明媚な名所

牛滝川(岸和田市)



一ノ滝

国の天然記念物に指定されている和泉葛城山のブナ林から流れてくる牛滝川。岸和田市の牛滝地区にある大威徳寺(牛滝寺)周辺は、古くから清流と滝、紅葉が織り成す景勝地として有名です。

大威徳寺は古来より葛城修験の霊場として崇敬されている山岳寺院で、空海も修行したと伝わっています。室町時代建立の多宝塔は、国の重要文化財にも指定されており、名利ならではの張り詰めた雰囲気にも包まれています。

境内には牛滝川の溪流へ続く遊歩道があり、水の流れる音を聞きながら歩みを進めると、一ノ滝、二ノ滝、三ノ滝、錦流の滝を見ることができます。一ノ滝は滝口から滝壺をじっくりと見ることができる均整のとれた滝で、錦流の滝は滝口から落ちる水が岩に当たって分かれる分岐瀑。いずれも規模の大きい滝ではありませんが、清らかな水が巨石を滑り落ちる姿が風情ある景観を作り出しています。この一ノ滝から錦流の滝までは徒歩10分程度で歩けるため、どなたでも楽しめる散策コースとなっています。また、大威徳寺の下流には温泉が楽しめる「いよやかの郷」があり、多くの人を訪れるリゾートとなっています。川岸は、子どもが川遊



大威徳寺の多宝塔

清流を守る取り組み

大威徳寺
いよやかの郷には多くの観光客が訪れます。



牛滝浄化センター

これらの施設

および地区住民からの排水による牛滝川下流域への水質汚染の影響を防止するため、平成11年に牛滝浄化センターが建設されました。また、岸和田市の学校などでは牛滝川の清掃活動なども実施。美しい川を維持するために、多くの関係者が努力しています。

びできるように整備されており、休日には多くの家族連れで賑わっています。

牛滝川が流れる牛滝山は、その名の通り牛との関わりが強く、かつては農家の人が牛を連れて大威徳寺へお参りしていたそうです。全盛期には美しく着飾った牛が集まる行事でしたが、現在は農作業の機械化が進み農耕用の牛が減少。廃れてしまったそうです。

時代の流れとともに牛滝川を訪れる人の顔ぶれも変化しました。しかし、来訪者の心を癒やしてくれる美しい流れは、今も昔も変わっていません。



場所／大威徳寺
アクセス／南海バス「牛滝温泉せせらぎ荘前」下車、徒歩約10分

ガアの瞳

水文化の未来像 ～天川村に見るひとつの答え～

現在、多くの市町村などで水辺を活用した取り組みが進められているように、水に着目したまちづくりが注目を集めています。そのような中、いち早く「水」にスポットを当てた取り組みを実施してきた村がありました。



水の神様を祀る天河大弁財天社

水とともに歩んできた村

吉野山地の中心に位置する奈良県吉野郡天川村。紀伊半島の中心である大峰山脈の山上ヶ岳、弥山、八経ヶ岳を擁する熊野川の、最源流部にあたる天ノ川が流れる山村です。ここでは古くから修験道や水の神様への信仰をはじめとする、水との密接な距離感を持った暮らしが営まれてきました。

天川村は高い山々と深い渓谷によって形成されているため、耕地に適した場所は少なく、冬はきわめて厳しい寒冷地帯であることから、原始遺跡はほとんど発見されていません。また、山岳は生命の源であるという畏敬の念と、吉野の山は神々がおわす天上の国という概念から、古くは人々の定住がはばかれた地域でした。しかし、この地が一種の聖域であったことが、修行者たちの行場を開ききっかけとなり、約1300年前の役行者による大峰開山以来、山岳修験道の根本道場として栄えるようになりました。

修験道とは仏教、道教、陰陽道などが融和して確立さ



女人禁制を守る山上ヶ岳への登山道

れた日本独自の宗教。役行者が山上ヶ岳にて金剛蔵王権現こんごうざおうを感じて山上に祭祀したのが始まりとされています。修験道の道場とされる大峰山系から熊野にかけては、75靡の霊場がありますが、中でも山上ヶ岳は今なお女人禁制であることで知られています。平成16年には「紀伊山地の霊場と参詣道」として、吉野大峯「大峯奥駈道」などは高野山、熊野古道とともにユネスコ世界遺産に登録されました。



役行者が開いた龍泉寺



天河大弁財天社の祭神は芸能の神様であることも有名

現在も天川村では、日常的に修験者や信者たちが行き交う光景が見られます。彼らは役行者が開いた龍泉寺にて水行を行い、八大竜王尊に道中の安全を祈願してから、登山するのがしきたり。また、洞川温泉で疲れた身体を癒やす姿も、古くから続く景観のひとつです。天川村の豊かな自然環境は、水やその起源である山岳への信仰を礎とする修験道を育み、村で暮らす人々は自然の恵みや感謝の祈りを捧げる文化を形成してきました。

一方、弥山にある天河大弁財天社も、天川村の人々と水を結ぶ大切な場所です。この神社の起源は、7世紀後半に吉野を訪れた大海人皇子が、吉野にて皇位継承の争いに勝てるように祈願したところ、役行者が弥山に祀った弁財天女が現れて戦勝を示唆したことに由来します。後に皇子は壬申の乱に勝利し、天武天皇として即位。弁財天女の加護に報いるために造営した「天の安河の宮」が天河大弁財天社のはじまりであり、天川村の由来になったとも言われています。天川村の人々は、水の神様である弁財天を祀る天河大弁財天社の信仰を核として繁栄しました。

このように天川村の人々は、自然へ感謝の祈りを捧げる修験道の聖地として、さらに水の神を祀る天河大弁財



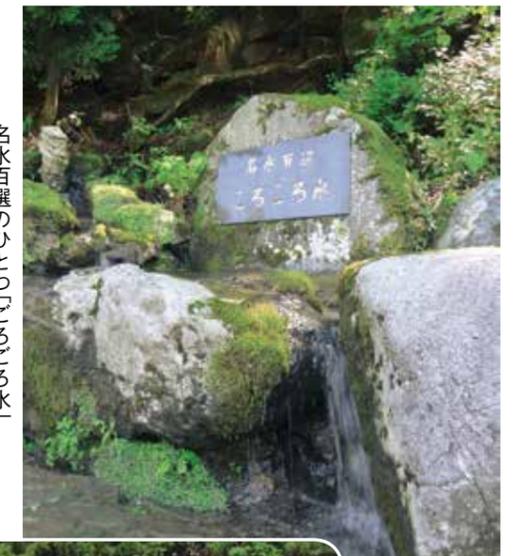
神の水として保護されてきた「泉の森」

天社への信仰を抱きながら、歴史を刻んできました。また、これらを支える豊かな水資源と常に接することで、水への親近感を持った文化を育んできました。

水を生かした村おこし

天川村では現在も豊かな水資源を残しています。

大峰山の登山口にあたる洞川地区は、古くから美しい湧水が出るところで、「ごろごろ水」、「泉の森」、「神泉洞」の3つの湧水からなる「洞川湧水群」は、環境庁の「名水百選」に選ばれています。ごろごろ水はその名の如く「ご



名水百選のひとつ「ごろごろ水」



「ごろごろ水」を採水する人々

ろごろ」と音を立てて流れていたことに由来する水。花崗岩と石灰岩の特異な地層から湧き出る水で、適度に含んだミネラル分はお茶や料理にも最適です。通常の水よりも長期間にわたって保存できるため、遠方から水を汲みに来る人も多い人気の水です。「泉の森」は、村の鬼門に位置する洞川地区の中の表鬼門にあたり、古くから神の水として大切に保護されてきた場所。「神泉洞」はその神秘的な美しさから「神の泉」として信仰の対象となりました。

一方、村の中央エリアにある「みたらい溪谷」には、みたらいの滝をはじめとする大小さまざまな滝があり、巨岩の間を縫うようにして清冽な水が流れています。エメラルドグリーンに輝く水と、四季折々に彩りを変える木々を見ようと、毎年多くの観光客が訪れています。

このような美しい水環境が守られているのは、天川村の人々の絶え間ない努力の賜物です。山や谷の湧水をそれぞれの家に引いて生活をしている地区では、現在も水当番が掃除や樋の点検・修理を行っています。「洞川湧水群」が環境省の名水百選に選定されているのも、水質や周辺環境だけでなく、住民の保護や保全活動、歴史などを総合的に踏まえた結果でした。



毎年多くの人が訪れる名水まつり

そして、天川村では名水百選に選ばれたことをきっかけに、水の大切さを伝える「名水まつり」を開催するようになりました。この「水」にスポットを当てたイベントでは、親子アメノウオ釣り大会といった自然を体感できる催しや、自然環境問題の重要性について学ぶことができるイベントなどを実施。クラフト教室や水生昆虫の観察会、野草観察、山菜の試食会なども人気です。天川村地域政策課の植村さんは「水は蛇口をひねれば当然のように出てくるとわれがちですが、実はそうではありません。水環境を守る人や取り組みがあるからだということを知ってほしい」と話します。

平成18年には、名水百選の所在する市町村が加盟している「全国水環境保全市町村連絡協議会」による名水サミットを天川村で開催。平成21年には「全国源流の郷



河川に放置されるごみ

協議会」による全国源流サミットも開かれました。これらの水環境保護の推進と水質保全意識の高揚を目的とする催しは、天川村の人々に「豊かな資源を確実に次世代に引き継ぐ使命」を再認識する気づきになったそうです。

しかし、最近では川沿いで行ったバーベキューのごみを回収せずに立ち去るなど、一部のマナーを守らない人々による環境悪化が問題となっています。「ごみの持ち帰りなどを周知する自然環境順守巡回パトロールなどを行っているのですが、なかなか改善されません」と植村さん。中には、バーベキューで使用した鉄板を放置して帰る人もいます。また、山林では鹿や猿といった有害鳥獣による原生林の荒廃も進んでいます。これは地球温暖化や林業の衰退により、有害鳥獣の行動範囲が変化したことなどが原因。このままでは山の崩壊や河川への土砂の蓄積につながると危惧されています。

台風12号の被害、そして復興へ

平成23年8月25日に発生した台風12号は、天川村に甚大な被害をもたらしました。台風12号の特徴は、気圧配置の関係で動きが遅かったために、長時間にわたって大雨となったことです。天川村では8月31日から9月4日までの5日間で1,000ミリを超える雨量を観測。特に累計雨量が500ミリを超えた9月3日には、1時間に40ミリの雨が降り、深層崩壊などの未曾有の災害が発生しまし

台風12号による被害

全壊	13世帯
大規模半壊	18世帯
半壊	16世帯
床上浸水	4世帯
床下浸水	14世帯
死者	1名



台風12号の被害状況。天川村中央エリアにて3カ所にわたり山が崩壊(平成23年9月6日撮影)

た。あしのせ谷では山腹の崩壊により天ノ川の流れが変わり、天川中学校の運動場が削り取られたほか、隣接していた教職員住宅と村営住宅が濁流に流されました。さらに、崩れた土砂が川をせき止め、自然のダムを形成。この天然ダムは天ノ川の逆流や滞留を引き起こし、河川増水による浸水被害が発生しました。

天川村に大きな爪痕を残した台風12号の影響は、観光客の減少にもつながりました。「村は大きな被害を受けましたが、ボランティアの方による活動や義援金などで、復興は順調に進みました。しかし、『天川村は危ない』とか『道が塞がって行けない』といった風評被害を受けまして…。年間65万人を数えた観光客が台風の翌年には、10万人近く減り、約55万人になってしまいました」と植村さん。風評被害は、直接被害のなかった洞川温泉などにも多大な影響を及ぼしましたが、減少した観光客をもう一度呼び込むために、イベントをはじめとする情報発信を行った結果、今年の観光客数は順調に伸びています。

植村さんは「あれから2年が経ちますが、大雨の日には当時の記憶がよみがえります。水は生命の源である一方で、時には命を奪う脅威になると、改めて感じました」と話します。

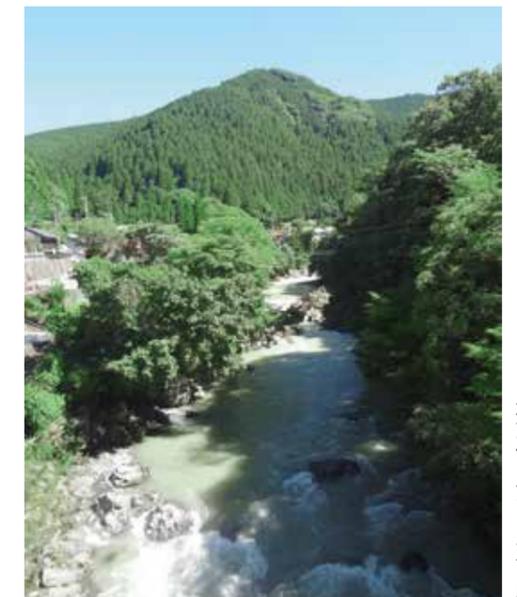
継承されていく水文化

これまで天川村では、地縁ある人々と共に生きる質実な暮らしが営まれてきました。しかし、現在は高齢化や人口流出、山岳部の森林荒廃、観光客のマナー低下によるごみ問題などの課題を抱えています。

これらの難問に対して、今、何ができるのか。

この答えの一つは、平成21年の全国源流サミットで出された「天川宣言」に書かれています。

1. 私達は、水の源である山岳を畏敬し、深い歴史と文



水文化を支える天ノ川

化を育んだ大きな自然に感謝の心を持ち続けます。

2. 私達は、源流地域の多様性や水と空気の供給をはじめとする公益的な機能による恩恵を、広く国民が享受できるように環境の保全と再生に取り組んでいきます。

3. 私達は、素晴らしい天川村の自然に抱かれ、住み暮らすものが元気に、そして喜びの心を持ち、次世代により良い環境を継承するため、未来に誇れる村づくりに努めます。

厳しい冬の先には、新しい命が育まれる春が待っています。この当たり前なことに対し、天川村の人々は感謝の気持ちを持って暮らしています。それは、自然の恩恵だけでなく、厳しさをも正面から受け止め、敬意を払い、その中から生まれてきた文化が息づいているからこそ。春を待つ息吹がどんなに冷たい積雪をも溶かすように、この村の力はさまざまな課題を乗り越え、これからも水文化を継承していきます。

水交

すいじんの
まじわり

湖国の学習船「うみのこ」

(滋賀県)

母なる湖・琵琶湖を舞台に、滋賀県内の小学5年生が必ず参加するのが学習船「うみのこ」での宿泊体験学習です。1泊2日間の中で、子どもたちは違う学校の子どもたちと同じ船に乗り合わせ、琵琶湖の環境や郷土、人とのふれあいの大切さを学びます。

「うみのこ」概要

全長	65.0m	
幅	12.0m	
高さ	20.0m	
計画満水喫線	1.0m	
総トン数	928トン(1総トン=2.8713m ³)	
航海速力	8~9ノット(1ノット=時速1.852km)	
最大定員	宿泊	乗船者240(120)名、職員33名
	1日	乗船者392(196)名、職員33名

()内は大人の人数



湖上の学校「うみのこ」

びわ湖フローティングスクールが行う学習船「うみのこ」の取り組みは、昭和58年よりスタートし、今年で就航30周年を迎えました。

乗船者数は延べ47万人を超え、滋賀県の人口の約3分の1が学習船「うみのこ」で学んだこととなります。

2日間の体験プログラムでは、カッター艇に乗り込んで、力を合わせて琵琶湖上へと漕ぎ出すカッター活動や、琵琶湖に住むプランクトンの観察、しじみのストラップ作りや水質調査など、琵琶湖を教材に環境について学ぶことができます。また、普段は訪れることのない地域の散策や、滋賀県産の食材を使った名物「湖の子カレー」などの食事、ヤシの実での甲板磨きも、びわ湖フローティングスクールならではの体験の1つです。

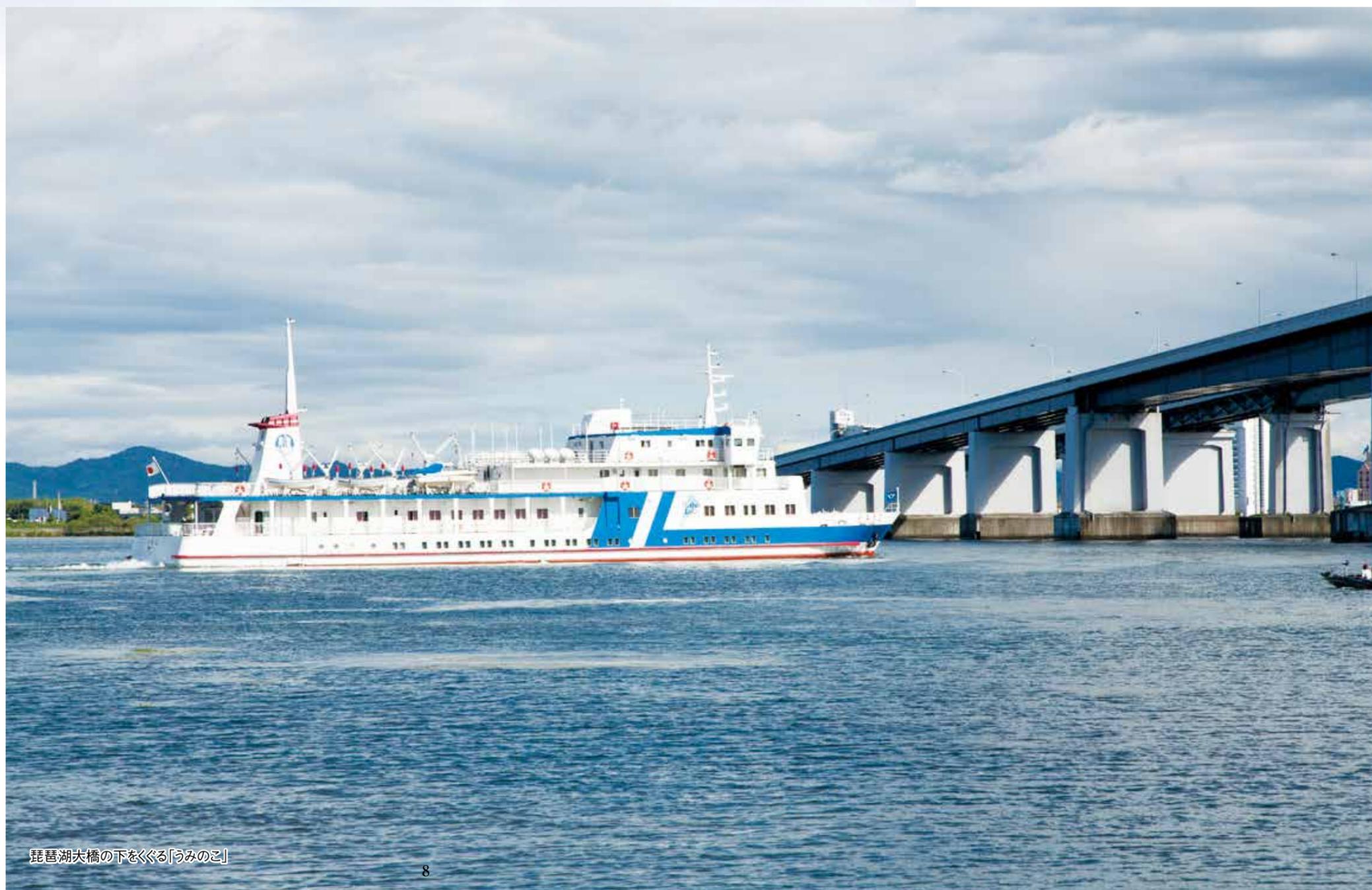
学習船「うみのこ」は昭和57年、「琵琶湖から生きた環境学習を」という声から始まりました。対象は小学5年生。船内の手すりや食堂のテーブルの高さ、部屋の広さは子どもたちの身長や体型に合わせて設計され、翌年58年から航海がスタートしました。1航海で160人から180人の子どもたちを乗せることができるようになってい

ます。
びわ湖フローティングスクールの所長、江川さんは「船という狭く限られた空間も、子どもたちの学びの1つです」と話します。「船内の水は限られた量しか積んでいませんし、寝場所や階段は決して広いスペースではありません。積んである分だけの水をいかに有効に使うか、狭い寝場所で頭をどっちに向けて寝ればみんな寝ることができるのか、階段は誰が上り下りするのか、待つのか。狭く限られた船だからこそ、子どもたちは譲り合いの心を持つようになるんです」。子どもたちに限られた資源や、譲り合いの大切さを教える「うみのこ」は船であると同時に、「先生」の役割も果たしているのです。



魔法の船

びわ湖フローティングスクールで学ぶ子どもたちが必ず行うのが、事前・事後学習。学校で環境について勉強し、「うみのこ」に乗ることで琵琶湖から自然の生きた知識を学びます。



琵琶湖大橋の下をくぐる「うみのこ」



琵琶湖上でのカッター活動



プランクトン観察



しじみのストラップ作り

「うみのこ内で学ぶプログラムについては30年前に、どんな学習をやるのかを想定して備品を用意してきました」と江川さん。「どのプログラムを体験するかは学校によってさまざまですが、私たちとしてはやはり環境に関わることを一番に取り組んでほしい。滋賀県は琵琶湖という自然の恵みを持っていて、例えば琵琶湖の色はプランクトンの色だと言われるくらい、湖にはプランクトンが豊富です。また、水の透明度も北と南、さらには天候によってぐんと変わってきます。嘉田知事がうみのこは環境学習船だと言われるように、琵琶湖でしか学べな

い授業があるんです」。水質調査やプランクトン観察の体験は子どもたちに人気で、「琵琶湖の水が北湖と南湖であんなに違いがあるとは思わなかった」、「琵琶湖がかげえのないものだとかわかった」、「プランクトンがあんなにたくさんいるのはすごいと思った」などの感想が寄せられています。

びわ湖フローティングスクールでのもうひとつの貴重な体験は、他の違う小学校の子どもと一緒に班になり、体験プログラムや寝食を共にすること。「この船は当初から違う学校の人と乗り合い、友達を作りましょうということが原則でした。班に同じ小学校の友達が1人もいない場合もあり、友達ができるかなと不安に思う子どももいます。でも、一緒にタウンウォークラリーをしたり、綱引き大会やご飯を一緒に食べているうちに、私たちが心配することなくすぐに仲良くなって。2日間を終えて港に帰ってくるころには、みんなたくましい顔つきになっていますね」と江川さんは話します。別の小学校の子どもとふれ合うことも、びわ湖フローティングスクールでの学習の1つになっているのです。

「初めは友達ができるかなと思ったけれど、簡単に友達になれました。うみのこは、友達が簡単にできる『魔法の船』でした」。びわ湖フローティングスクールには友達ができたという、子どもたちの嬉しそうな感想も多く寄せられています。



「船から学び、琵琶湖から学び、人とのふれあいから学ぶ」。多様な学びを子どもたちに与えるびわ湖フローティングスクールの取り組みは、民間会社や地域ボランティア、そして県の財政など、さまざまな人たちに支えられています。



琵琶湖の水質調査

子どもたち160人程度に対して、操船と機関、食堂スタッフとして11人の民間企業の方が共に乗船。子どもたちに人気のカッター活動は、学校の先生方と共に地域のボランティアが乗り合わせ、子どもたちの安全をサポートしています。「10年くらいボランティアに来ていただいている方もいます。ボート部やヨット部出身の方方で、中には70代の方も、子どもたちのために来られるんですよ」と江川さん。また、教師を目指す大学生ボランティアも多く「うみのこ」に乗られるそうです。「将来教師になりたいという学生は、小学生を教える学校現場がどういうことをやっているのか知りたいですし、子どものときにびわ湖フローティングスクールを体験された教員希望者も多く来られます。また、最近では親子2代にわたる乗船者もいます。学習船『うみのこ』の認知度は高く、琵琶湖を中心として県民の心がつながっているんです」。

今年は就航30年という節目の年で、びわ湖フローティングスクールでは「記念航海」という取り組みが行われました。1回200人を3航海、計600名の募集に対して、応募はなんと1500人。応募者の中には、「自分が6年生のときに湖の子の取り組みが始まり、1年違いで乗ることができなかった」、「風疹で乗ることができなくて、20年ぶりにやっと念願がなって乗れた」とい



ヤシの実を使って甲板を掃除する子どもたち



3階の甲板から陸地に向かって手を振る子どもたち方もいます。びわ湖フローティングスクールが作り出す思い出は、県民全体の心に強く根づいているのです。

「うみのこ」に乗船する際に、子どもたちが支払うのは食事代の1900円のみ。港までのバス代や保険などの経費は、すべて滋賀県の税金で賄われています。江川さんは、「それだけの経費がかかっても30年こうして続けてこられたのは、県民全体がフローティングスクール事業を守っていきたいと思っているんですよね。それくらい、「うみのこ」は滋賀県内で広く愛されているんです」と話します。船の老朽化や財政面などの課題もありますが、「うみのこ」は今日も自然を愛する地域住民に見守られながら、子どもたちを乗せて航海を続けます。

2日間の主な日程

時刻	第 1 日 目							第 2 日 目													
	10:00	12:00	13:30	17:00	19:00	20:30	22:00	6:00	7:00	7:30	9:00	12:00	13:30	14:30	15:30						
活動	出港見学 (乗船)	開校式 オリエンテーション	避難訓練	昼食・船内見学	船内での活動	寄港地での活動	夕食・シャワー	「湖の子」のタペ	就寝準備	自分を見つめる時間	消灯・就寝	起床・洗面	身辺整理	朝のつどい	朝食	寄港地での活動	船内での活動	昼食	まとめ・荷物整理	「湖の子」掃除	閉校式 (下船)

平野下水処理場で 下水汚泥固形燃料化事業を進めています

大阪市平野下水処理場では、汚泥焼却炉が老朽化したため、その改築更新に併せて汚泥固形燃料化施設の建設を進め、平成26年4月から供用開始を予定しています。

この施設は資源の有効利用の観点から、下水処理の最終過程で発生する生成物の有効利用を実施。下水汚泥を炭化した上で、石炭代替燃料として有効利用することで下水汚泥の全量有効利用を行います。さらに、石炭代替燃料として有効利用することで、化石燃料の使用を減らし、環境負荷の軽減に寄与します。また、PFI方式を採用することにより、民間事業者の独自技術や創意工夫を活用することで、より効率的で経済的また環境にやさしい施設の実現を図ります。



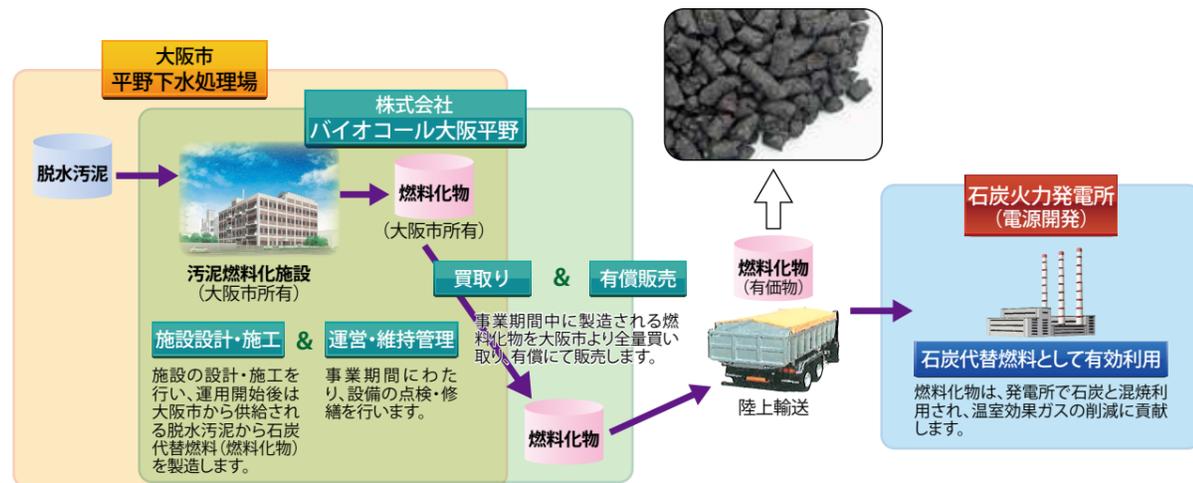
炭化炉



燃料化施設の完成イメージ図

施設概要

- ・ 処理方式…………… 低温炭化方式
- ・ 施設能力…………… 33t-DS(乾燥固形物量)／日
(標準脱水汚泥150t-wet／日)
- ・ 計画処理量…………… 10,890t-DS／年(稼働率90.4%)
- ・ 最終生成物量…………… 炭化燃料化物8,558t／年
- ・ 燃料化物性状…………… 炭化燃料化物13.0MJ/kg
(石炭の約半分の熱量)
- ・ 運営期間…………… 平成26年4月～(20年間)



汚泥固形燃料化事業概要図

南部水みらいセンターで 太陽光発電プラントが供用を開始しました

東日本大震災と原発事故を契機に、大阪府では新たなエネルギー社会の構築に向け、府有施設を活用した再生可能エネルギーの普及拡大を図っています。

この一環として、平成24年度に南大阪湾岸流域下水道南部水みらいセンター（泉南市、りんくうタウン内）において、太陽光発電プラント（メガソーラー）を導入する事業に着手。このたび施設が完成し、平成25年9月より発電を開始しました（再生可能エネルギー固定価格買取制度を利用するメガソーラー施設としては大阪府初）。

本事業では、まとまった空間を有する水みらいセンター用地を活用し、大阪府が民間企業の資金とノウハウを活かしてリース方式によりメガソーラー施設を運営します。平常時は再生可能エネルギー固定価格買取制度による電力販売を行い、「創電」による地域の電力供給に寄与すると共に、大規模災害による長期停電時には非常用電源の一部として利用し、防災力の強化を目指します。

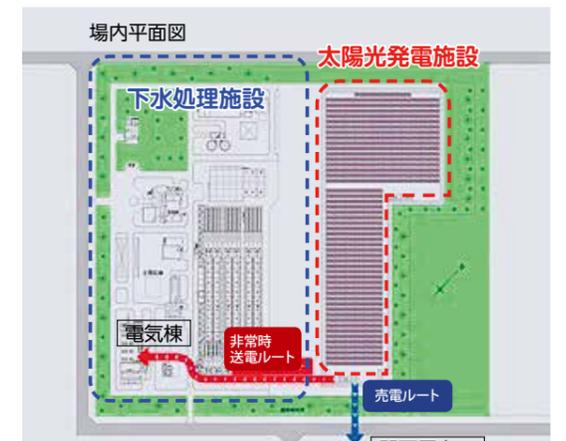
大阪府では今年度、南部水みらいセンターに引き続き、南大阪湾岸流域下水道の北部、中部の両水みらいセンターでも太陽光発電プラントの導入を進めており、今後も再生可能な自然エネルギーの普及拡大に取り組んでまいります。

事業概要

- ・ 事業面積…………… 約3ha
- ・ 太陽光パネル使用枚数…………… 7,920枚
- ・ 出力…………… 1,990KW
- ・ 推定年間発電量（平年値）…………… 約2,150,000KWh／年
※一般家庭約600世帯分
- ・ 発電期間…………… 20年間（平成25年9月～平成45年8月）



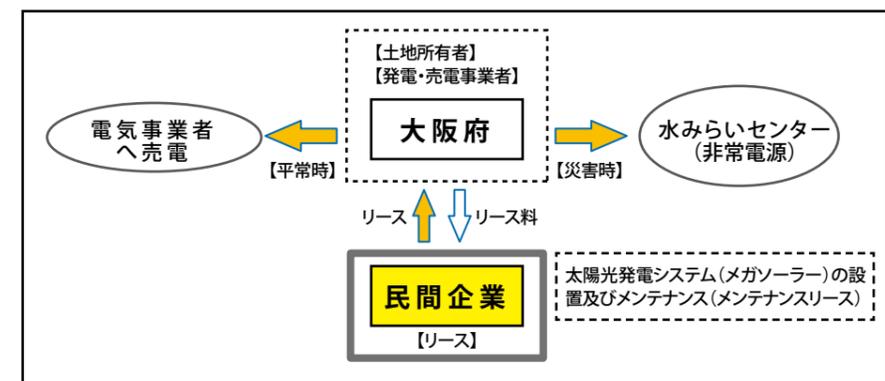
南部水みらいセンター全景写真



施設配置図



太陽光パネル設置状況



事業スキーム

ミャンマー・ヤンゴン市との技術協力の開始

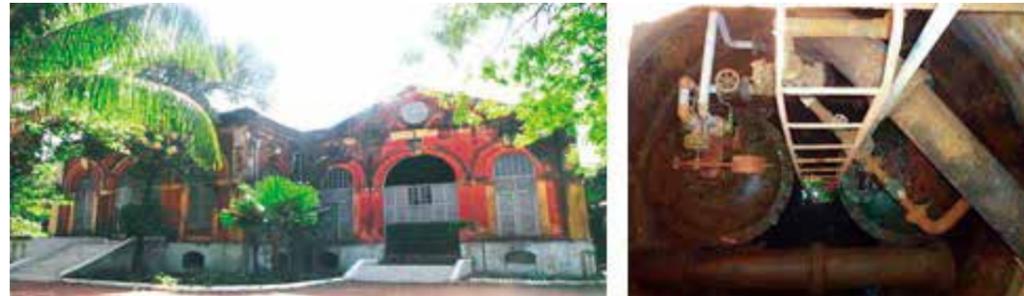
当センターと大阪市建設局は、(財)自治体国際化協会の自治体国際協力推進事業を活用し、ミャンマー・ヤンゴン市との下水道分野での技術協力事業を開始しました。この一環として、9月2日～7日に、ヤンゴン市都市開発委員会の上下水道部職員3名を招聘して研修を実施しました。具体的には、下水道計画や維持管理の講義に加え、交通渋滞の著しいヤンゴン市での適用が期待される下水管工事の非開削工法(推進工法)の講義・視察や、活性汚泥の酸素利用速度測定演習などを実施しました。いずれのプログラムも、現地への渡航経験が豊富で、現地の下水道事情を把握している職員が中心となり検討したものです。

1週間という非常に短い研修でしたが、3名の研修員は、非常に熱心に取り組み、習得した情報・技術を現地の業務で活かしたいと意気込んで帰国されました。

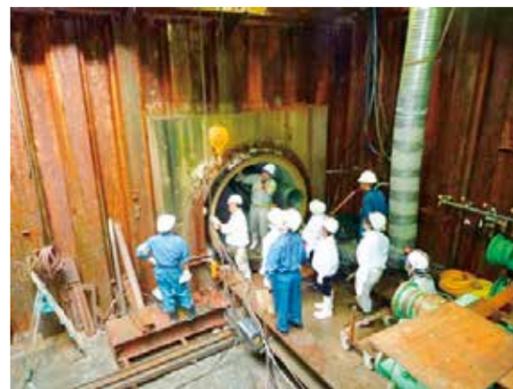
ヤンゴン市では、下水道人口普及率が7%程度に止まっており、また、下水処理場の維持管理にも、まだまだ改善すべき点が多くあり、彼らの前には、解決すべき課題が山積しています。一方、1890年代に建設された下水道収集システムを修繕しながら使用するなど、古い施設を大事に使う姿勢は、我々と共通しており、勤勉な国民性と合わせて、諸問題解決の大きな力になると期待します。

今後も、大阪市とヤンゴン市の技術交流を継続し、ヤンゴン市の発展に何らかの形で貢献できればと思います。

1890年に建設されたコンプレッサーステーションと下水圧送システム



推進工法の工事現場視察



財団法人 都市技術センターから「一般財団法人 都市技術センター」に名称変更しました

このたび当財団は、新公益法人制度にしたがい、大阪府知事の認可を受けて平成25年4月1日付で「一般財団法人都市技術センター」へ移行しました。

今後、一般財団として事業目的達成に一層努力いたしますので、引き続きご支援いただきますようお願いいたします。

平成25年度 下水道排水設備工事責任技術者試験および更新講習を実施しました

平成25年度下水道排水設備工事責任技術者試験を、8月24日(土)(午前、午後の2回)に実施しました(試験に先立ち、8月9日(金)に受験講習会を実施)。今年度は、35市町村から325名の方が受験されました。

また、平成25年度下水道排水設備工事責任技術者更新講習を、9月7日(土)と14日(土)(エル・おおさか:大阪市中央区)に実施しました。今年度は、2日合わせて1,418名の方が受講され、修了者には大阪府下水道協会から修了証が交付されました。



紙面に関するご意見・ご感想をお聞かせください

「Mer」では、大阪府下を中心とした下水道情報を織り交ぜながら、水そのものや水環境、都市環境、水にかかる生産活動などに関する幅広い分野の情報を掲載しております。当センターでは、この「Mer」のより一層の紙面充実を図るため、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。関心を持った記事や取り上げてほしい内容・場所・地域などをご記入ください。

応募方法 メール・FAX・ホームページにて
 メール: info@owesa.jp
 FAX: 06-4963-2095

本書を作成するにあたって、参考にさせていただいた資料一覧

- 岸和田市公式ウェブサイト
- びわ湖フローティングスクール 学習のしおり
- 滋賀県立びわ湖フローティングスクール事業 説明資料
- 滋賀県立フローティングスクール ウェブサイト
- 天川村総合案内パンフレット
- 広報てんかわ臨時号
- 全国源流の郷協会パンフレット
- 天川村提供資料 など